十文字学園女子短期大学研究記要第26集　1995年

枕草子「雨のうちはへ降るころ」の段の年時

―章段構成の手法についての一考察―

赤間　恵都子

はじめに

枕草子の章段で、事件年時を明らかに推定しうるものは多くはない。その原因は第一に章段本文から見つけることのできる徴証が乏しいためであるが、さらに作品が史実上の事件をそのまま写したものではなく、それらを巧みに構成することによって創りだされた世界であることにも因ると考えられる。しかし、そのような認識に立って改めてこの作品を読み、それぞれの章段における作者の執筆意図を捉えるとき、そこから逆に年時考証の糸口をつかむ事ができるのではないだろうか。本稿はその試みの一つとして「雨のうちはへ降るころ」の段の年時について考えるものであり、また枕草子の作品形成の要と思われる章段構成の手法を探る一考察である。

一

最初に、九九段「雨のうちはへ降るころ」の内容と従来の年時考証を概観しておこう①。

雨の降り続いていたある日、天皇から定子への御使いとして式部丞信経が訪れる。清少納言が応対して敷物を勧めると、信経は足跡がついて汚くなるからと遠慮している。そこで清少納言は、「(いや)どうして。洗足料(足を洗う用)にはなるでしょう」と、氈褥(せんぞく)(＝敷物)に洗足を掛けた洒落で答え、信経をくやしがらせた、というのが最初の話である。以下、章段全体は、次のような内容の三段落からなっている。

第一段落　式部丞信経に対する清少納言の機知ある応対。
第二段落　清少納言が信経に話す打聞きと信経の退散。
第三段落　信経が作物所別当だった時、その悪筆を清少納言がからかった逸話。

さて、この段の年時考証の唯一の拠り所は、登場人物である藤原信経の官職に関して三巻本勘物に記された二つの記事、すなわち信経が式部丞であった長徳三年一月から同四年一月の時期を記す記事と、兵部丞信経が長徳二年五月三日に作物所別当を兼任しているという記事である。従来、それによって年時が推定されてきた。

まず、第一段落と第二段落は、信経が中宮の在所を訪れてから帰るまでの、一続きの出来事を扱ったものである。その年時は「御使」の式部丞として信経が訪れていることから、信経が式部丞の期間で、定子が内裏にいない時期が考えられる。定子の方は、長徳二年

の二月末に内裏を退出して以来、長徳の変（長徳二年四月）を挟んでしばらく入内がなく、長徳三年の六月末に職曹司に参入して、そこに翌年まで在住していた。つまり、信経の式部丞在任期間は定子が内裏に入内しなかった時期に含まれることになる。したがって、第一、第二段落の年時は信経の式部丞在任時である長徳三年一月から翌四年一月まで、ほぼ長徳三年の間のことと推定される。

次に第三段落であるが、冒頭が「作物所の別当するころ」という記述で始まり、そこに「信経が」という主語が当然想定されるので、彼が作物所の別当だった時のこととなる。したがって、第三段落は長徳二年五月三日以降と推定される。

従来提出されている年時考証の説は、だいたい以上のようなものである②。考証がこれ以上詳しくならないのは、この章段が特別な事件を記したものではなく、定子サロンにおける清少納言の日常生活の一齣として、特に日時を限定する必要もないものと読まれてきたことにも関係していると思われる③。しかし、ここまでの考証においても明らかに認められる留意点が一つある。それは、章段前半の第一、二段落の記事より後半第三段落の方が時間的に前の話になり、章段内で、作者が時間を遡って述べていることが認められるという点である。

枕草子における時間逆行の例はそれほど多くはないが、同様な例として、一五七段「宰相中将斉信・宣方の中将・道方の少納言など」が掲げられる。それは、七夕の日に藤原斉信と応酬した作者が、その応酬の契機となった四月の出来事に遡って事情を説明するというものである。この構成を理解するには、事件について語ろうとする作者の執筆意識の流れを正しくとらえる必要があった④。当章段についても、作者の執筆意識の流れをたどれば、第二段落の終わりに信経の悪筆について触れた女房の言葉、「いみじう真名も仮名もあしう書くを、人笑ひなどする、かくしてなむある」に触発されて、以前あった信経の悪筆に関する出来事の第三段落に展開したと見られるだろう。

しかし一方、この章段の展開は、一五七段の場合のように時間を遡ることによって話の筋を活性化させるというより、むしろ前半第一、二段落の話の本筋から外れるやや唐突な感じを受けることが気にかかる。清少納言が式部丞信経に応対し、機知的なやりとりを披露するサロンの一場面の後に、信経の悪筆を殊更に取り上げ、笑い者にした過去の出来事を語る必要はあったのか、そこには、もう少し考えるべき問題が潜んでいるのではないだろうか。

二

この章段で、式部丞信経が天皇の御使いとして定子の居所を訪れたことは、かつての、たとえば積善寺供養の二六二段において、定子の居所（積善寺と二条宮）に御使いとして訪れた式部丞則理の場合とは、その意味する度合いが大きく異なっていたであろう。それは、中関白家の栄華期と零落期における天皇から定子への使いの重要性の違いであり、九九段の清少納言が信経にことさら絡んだ理由も、その辺りに関係してくるものと考えられる。しかし、先にも述べたように、章段後半に信経の悪筆をからかう話に持っていく展開は、少し不自然な印象を受ける。それは、この章段がいわゆる後期章段における「笑い」⑤を取り入れるために作者によって方法的に再構築された結果がもたらしたものであろうか。そうだとしても、第一、二段落から第三段落へ語り継ぐ作者の意図はどこにあったの

か、もう一度、この章段の年時と章段構成について詳しい考察を試みてみたい。

まず、年時順に後半、第三段落の「作物所の別当するころ」以下について再考してみよう。この段落の年時は、先に、信経が作物所別当に任ぜられた長徳二年五月三日以降であると推定された。その下限は前半一、二段落からの話の展開から見て、前半の時期からある程度の時間を遡った、信経が式部丞に任官する長徳三年正月以前と考えられるが、さらに、その年時をもう少し限定できないだろうか。長徳二年には作者が里居していた期間があり、その時期はこの段で信経と関わるサロン女房としての作者の立場にそぐわないと考えられる。したがって作者里居の期間（従来の説では夏から秋頃まで⑥）を除いて、年時はそれ以前か以後と考えるのが妥当であろう。

ところで、作物所とは宮中の調度類を調達する役所である。「天皇個人のもの及び天皇家のものなどは、すべてこの作物所において作られていた」という⑦。勘物にあるように、長徳二年五月三日にその長官である別当を新たに任じたとすれば、その頃、何らかの調度類を調達する必要が宮中で生じたためではないだろうか。枕草子本文では、その「ものの絵やう（＝絵図面）」を見た作者は、「誰がもとにやりたりけるにかあらむ」と書いているが、調度の明細が清少納言の目に触れたということは、それが、やはり定子に関係したものでなかったかということを推測させる。信経は清少納言に「ものの絵やう」の承認を得たかったのではないだろうか。ところが、清少納言はその内容より信経の筆跡に難癖を付けた上、殿上に突っ返してしまったのである。殿上で笑い者になってしまった信経に対して、作者は「（信経が自分に対して）おほきに腹立ちてこそにくみしか」と突き放したように記し、章段を閉じている。

この時の清少納言の辛辣な行動とこの記述には何か理由があるのではないだろうか。長徳二年五月といえば、折りしも定子は懐妊中であり、信経が指示した調度が定子に関係したものと考えるなら、あるいは定子出産に伴う準備の品であったかもしれない⑧。しかし、この頃定子は、前月末の伊周・隆家左遷の騒動に巻き込まれ、自ら剃髪という非常事態の最中にあった。定子周辺が最も緊迫していた時である。さらに、清少納言自身にも、道長方に通じているという不穏な噂がたっていた。定子サロンの女房として外部に対して平静には対処できない気持ちが、清少納言を駆り立て、ぶつけようのない怒りが信経に向かったと見てはどうだろう。私は九九段後半のこの事件が、作者の宮仕え生活にとって最も厳しい一時期にあったと見て、その年時を信経の作物所別当就任後間もない五月頃に重ねて考えたい⑨。そして、この直後に作者は定子の許を離れ、長期の里居に入ったと見る。

次に、九九段前半の年時についても、先にほぼ長徳三年の間のことと推定しておいたが、もう少し絞ってみたい。そこで、章段冒頭の「雨のうちはへ降るころ、けふも降るに」という記述を長雨の季節と見て、年時は長徳三年の夏、五月頃と考えてみる⑩。すると奇しくも長徳二年五月頃と推定した後半の記事からちょうど一年後のことになる。そして、その抜けた時間の中に、ここには書かれていない作者の里居の期間の存在が浮き上がってくるのである⑪。

長徳二年の長期里居は、作者にとって、定子サロンから離れるかもしれない危機の時期であった。再出仕し、今度は式部丞となって現れた信経に対峙した時、作者は必然的に一年前の事件を思い出したにちがいない。天皇からの使者として訪れている彼を、かつて作者は宮中の笑い者にしてしまったのだったと。その事件のあった時

と今との間には作者自身の身辺の変化もあった。経てきた時間を認識する時、作者は意識の動くままに過去へと遡る章段構成をとったのではないだろうか。

この段には、前後半を通して定子サロンの女房として信経に対峙する清少納言の姿がある。しかし、その内部に実は作者里居の深刻な時間を抱えているとしたら、長期里居の後、再出仕を決意した作者が、定子の許を離れていた期間を故意に省いて語ったことになる。信経の悪筆を殊更に取り上げることによって、里居の時間を飛び越え、前後の記事は繋がれた。だが、過去の時間を認識する作者の意識が逆に、話の流れの不自然さとなって表れてしまったのではないだろうか。このように、九九段は、作者が時間を再構成して意図的に記事を繋ぐことにより生み出された一段であると私は考え、年時を前半は長徳三年五月頃、後半はその前年の同じ季節、長徳二年五月頃と推定してみたのだが、いかがなものであろうか。

この章段から導き出される枕草子執筆上のトリック、それは章段構成の中にある。この作品を通して窺う史実が歴史的史実から距離があるように見えるのは、作者が史実を曲げて書くからなのではなくて、史実を巧みに繋げるその章段構成のせいであると考えることができるのである。枕草子の一筋縄ではいかない章段構成について、他段にも目を転じて考えてみたい。

三

「雨のうちはへ降るころ」の段において問題にした、時間逆行の章段構成について二つの章段を取り上げ、その生成過程という観点から見てみよう。

枕草子の章段には、注意してみると実は時間を逆行させているのに、それを読者に気付かせないほど文章的に練れた例がある。次の章段をみてみよう。

① 御かたがた、君達、上人など、御前に人のいとおほくさぶらへば、廂の柱に寄りかかりて女房と物語などしてゐたるに、ものを投げたまはせたる、あけて見たれば、「思ふべしや、いなや。人、第一ならずはいかに」と書かせたまへり。

② 御前にて物語などするついでにも、「すべて人に一に思はれずはなににかはせむ…（略）…一にてをあらむ」などいへば、「一乗の法なり」など人人も笑ふことのすぢなめり。

③ 筆、紙などたまはせたれば、「九品蓮台の間には、下品といふとも」など、書きてまゐらせたれば、…（以下略）

定子を囲んで中関白家の一族や、殿上人たちが多く侍っている場での、清少納言と定子のやり取りを述べる九七段である。定子から清少納言に投げられたものには、仏教問答のような問い掛けがかかれていた。これは、実は、清少納言が常々「人に第一番に思われたい」と口にして、まるで法華経にいう一乗の法（「唯一乗の法有り。二無く亦三無し」）のようだとからかわれていたことを捩った問い掛けであった。清少納言は、定子に思われるなら最下等の位置でもいいという返事を書くが、それは定子の気に入らず、「第一の人に、また一に思はれむとこそ思はめ」という言葉を頂く。作者にとって、定子に第一に思われようと口に出すことは恐れ多いことであり、この定子の言葉はありがたくうれしく思われたであろう。おそらく作者にとって忘れられない定子との交流の一つを描いたものである。

章段全体は三段落に分けられるが、その年時は、冒頭場面の記述や、我が身を「一の人」と自ら述べる定子の言葉などから、三段と

も中関白家全盛期の道隆薨去前（長徳元年四月以前）と考えるのが適当であろう。しかし、その構成は、ある日の出来事①③の中に、少し以前の逸話②が挿入されて①の定子からの問い掛けの意味を説明し、それを受けて③の清少納言の返事が書かれることになっている。つまり、時間的な順序としては②①③が正しいが、ここにちょっとした時間の逆行が行われているのである。しかし、その文のつなぎ方は滑らかで、不自然さが感じられないばかりか、かえって作者の語り口が生き生きとしたものになっているといえよう。

この九七段に対して、よく似た内容の、しかしこちらは時間の順に語られた二六一段を比べてみよう。

1　御前にて人人とも、またものおほせらるるついでなどにも…（清少納言は平生、どんなにつらい時でも、白い綺麗な紙とよい筆、また高麗ばしの畳を見ると心が慰められると言っていた。）

2　さて後ほど経て、心から思ひ乱るることありて里にあるころ…（定子からすばらしい紙が届けられた。）

3　二日ばかりありて、…（男が高麗の畳を持ってきたので、定子からだと思う。）

4　二日ばかり音もせねば疑ひなくて…（右京の君に探らせ、文を書く。）

これは、清少納言の周辺に不審な噂がたって、そのため長期里居をしていた時（長徳二年のころと推定される）に、定子から紙と畳の贈り物が届けられた話を語る段である。上等な紙と畳は、かねてから清少納言が、どんなときでもそれを見れば気持ちが慰められると言っていたもので、そのことを定子が覚えていてくれたのであった。

四段落からなるこの段の構成をみると、1はいつの事かわからないが、2の随分以前の話であることが、第二段落冒頭「さて後ほど経て」の記述や、文中の「思ひ忘れたりつることを思しおかせ給へりけるは、なほただ人にてだにをかしかべし」という作者の言葉などから推定できる。また、3は2から数日後、4は3から数日後のことであるから、1と2以下の段落との間に時間的な断層のあることがわかる。

この段を先の九七段の語り口に対応させてみよう。当段で「御前にて人人とも、またものおほせらるるついでなどにも」と語りだされる1は、九七段で「御前にて物語などするついでにも」と語りだされる②に相当するから、その順序を九七段のようにすると、2 3 1 4となる。また、2 1 3 4と語ることも可能であったろう。九七段では、時間の順序を変えることによって、作者の生き生きとした語り口を演出していた。当二六一段も同様に語られてもよかったのに、作者は今度はそうしなかった。それは、この段の扱っている内容が、作者にとって心踊るものではなく、しみじみと思い返される里居中の出来事であったことにも関連しているかもしれない。

ともあれ二つの段を比べてみると、いくつかの記事を構成し、一章段を形成していく作者の執筆過程の段階、また、その構成の多様性を垣間見ているようで面白い。一つの章段を作り上げる過程において、作者はその章段の内容を語るのに適した小単位の記事のいくつかを、いろいろと構成しながらまとめていったのであろう。枕草子の章段ごとにその構成方法が様々に試みられていったものと考えられる⑫。

四

九七段と二六一段は、因果関係のある離れた時間を扱って定子と清女の交流を描くという、酷似した内容を持っていることで選び、その章段構成の違いを比較してみたのであるが、両者の間には、実は別の大きな違いがあることに注目したい。それは、二六一段は九七段に比べて、扱う記事の間に時間の開きがかなりあるらしいことである。

九七段においては全体が中関白家栄華時のものであり、定子が暗示した一乗の法の話は、それを使って定子が清少納言に問い掛けた時点のごく近い時期に女房たちの間で取り沙汰されていたことであった。対して二六一段の最初の話は、普通の人は忘れてしまいそうな以前のことを定子が覚えてくださっていたと書かれるほど、時間の離れた話なのである。清少納言が上等な紙と畳に心慰められる云々と言っていたのは、時期は特定できないが、中関白家栄華時（長徳元年以前）を含めて考えることもでき、その清少納言の言葉が定子によって実行されたのは、長徳二年の清少納言里居中のことと考えられている。ほぼ同時期の話を取り上げる九七段に対し、二六一段は、かなり前の時期の話を組み入れて、章段を構成しているようなのである。

一章段の中において、このような時間の開きのある記事を構成することは、それらの記事を結びつける力が強いということであろう。その力とは、いうまでもなく章段を構成する作者の執筆意識の問題である。同じように作者の強い執筆意識の働いた、大きな時間逆行を持つ章段が、先に述べた宰相中将斉信の一五七段であり、本稿で考証した信経の九九段であるといえよう。そしてここで気付くのは、これらの章段の年時がいずれも長徳二年に関わっていることである。長徳二年といえば、中関白家および定子にとっての厄年であり、その一時期に作者が長期の里居をしていたことは、先にも触れた。その時期に関わる章段に記事間の時間逆行や時間跳躍の現象があるということは、何を意味しているのだろうか。以下に、長徳二年に関連する章段について、その時間的構成に焦点をあてて順に見てみよう。

一五七段「宰相の中将斉信・宣方の中将・道方の少納言などまゐりたまへるに」については、以前、その特殊な構成に着目して考察したことがあるが[13]、それは長徳元年の四月から翌二年四月にわたる間におこった、いくつもの記事を繋いで語られている章段である。この段の中心人物である藤原斉信が、宰相になった時期（長徳二年四月）を示す記述の一部が、この段前半の推定年時（長徳元年七月）と齟齬を生じているという問題もある。章段の主題である「過ぎたること忘れぬ人（斉信）」が象徴しているように、この段は、いついつの出来事を記録するという意識からは大きく離れた、作者の記憶の綾を辿って紡ぎだされたような章段といえるだろう。

また、この段の特徴として、斉信の言動の叙述を中心に、助動詞「き」が特に多く使用されているという指摘があることは注目される[14]。指摘された松本氏は、それについて、中関白家から遠ざかった人物である斉信は、叙述に際して現前化されうるものではなく、過去の人物として枕草子の世界に定着され、「不在感」を伴って回想されるしかないものであったためという、作者の執筆意識の問題として考えておられる。斉信の叙述に対する作者の強い執筆意識が、この段の広範囲の時間に亙る記事を構成する力として強く働いたと指

摘することもできるだろう。また、特にこの段に「き」叙述が顕著に見られる理由としては、章段内の年時の齟齬ともあいまって、各記事を繋いで述べる執筆時点が記事年時からある程度離れている問題とも関係しているように考える。

一三八段「殿などのおはしまさで後」は、長徳二年の作者の里居を中心に、その再出仕までを語る段である。この段については、別稿において考察し、作者の再出仕の時期を従来の長徳二年秋から翌三年春まで延長させる仮説を提出してみた[15]。私の仮説では、この章段は長徳二年秋から長徳三年春頃の記事へとつないで語る構成になり、一章段内に半年の時間の開きのある記事を扱う例となる。もう一つ、同時期の作者の里居を扱った八〇段「里にまかでたるに」についても、記事年時は最後に清少納言と橘則光の絶縁を記す長徳四年頃にまで及んで述べられている。つまり、長徳二年の作者里居に関するこの二段は、半年から二年もの長い期間にあった記事について、それら全部を総括して見られる後日に執筆していると考えることができるのである。

最後に、枕草子成立の問題に絡む箇所として常に取り上げられる跋文について考えてみよう。跋文は、初めに定子から草子を下賜された事情を語り、次に枕草子の内容に言及し、終わりに草稿本が源経房によって持ち出されたという流布の事情を記す。初めの記事から終わりの記事の間に、枕草子草稿本が書かれるだけの時間があり、さらに、それが作者の手元を一旦離れて再び戻り、その後再校本の書かれる時間を経過してから跋文は書かれたものである。

そこからは、草稿本を再校し、まとめた時点の作者の意識がとらえられると共に、その際、過去の記事を再度見返して、とらえ直す視点を得たであろう作者の新たな執筆活動が推測される。この時作者は、それまでよりもっと長い時間の流れの中から、いくつかの記事を選び出して章段構成するという手法を持ち得るようになったのではないだろうか。草稿本流布の年時は経房が伊勢の守で、作者が里居中であった長徳二年頃であり、それ以後に書かれた長徳二年の章段が時間的に離れた記事で構成されていることの理由も説明できるように思う。

以上、概観してきた長徳二年の時期に関係する章段は、いずれもその記事年時を狭い時間の範囲に収めることの出来ないものばかりであり、当然、その執筆年時も各章段の最初の記事年時からは、かなり離れたものであることが考えられた。長徳二年（夏以降）は作者の里居の時期であり、それは定子サロンの女房としての作者の継続的な執筆活動が一時滞っていたことを意味しよう。その時期を経てサロンに復帰し、枕草子草稿本を再び手にした作者は、長期的な歴史の時間の流れの中から新たな枕草子の時の流れを作り出す視点を得、しばらく筆を擱いていた長徳二年の記事を用いて、大胆な時間逆行の方法などを駆使しつつ、章段を構成していったのではないだろうか[16]。

まとめ

「雨のうちはへ降るころ」の段の年時について考察し、さらにその延長線上にある、章段構成の問題について考えてみた。この章段に認められる時間逆行の構成は、作者がいくつかの記事を構成していく際のバリエーションとして、他章段内でも試みられていたものであるが、それが、長徳二年に関わる章段において記事間の時間の幅が大きくなること、また、時間逆行のない長徳二年関係の章段にも、

時間的に離れた記事をつなぐ、跳躍的構成が見られることが確認された。

長徳二年という年は、作者と作品にとって重大な転機となった時期であり、歴史的時間に対抗し、意識的に章段構成を謀っていく作者の姿勢が、それまでにない記事の時間的操作となって表れたと考えられよう。そして、九九段「雨のうちはへ降るころ」もその顕著な例と考えられる。本稿に考察したように、前半の記事を長徳三年五月頃、後半を長徳二年五月頃と仮定するなら、一見何事もなかったように語り継がれるこの章段が、実は内に長徳二年の作者里居の時期を抱え込んでいることになる。

信経を殊更に笑い者にすることによって強引に結ばれた里居前後の記事に託されたものは何か。章段内に直接の登場はないものの確かに伝えられる定子の存在と、そのサロンの表に立って信経に対峙する清少納言というこの段の構図自体が示しているように、それは長徳二年の波乱の時期を乗り越え、新たに枕草子に取り組もうとする作者の強い執筆意識ではなかったろうか。この「雨のうちはへ降るころ」の段は、長徳二年との関わりの中で作者が時間的構成を駆使して作り上げた章段の一つであると考え、本稿の年時考証を一試案として提出したい⑫。

（注記）

① 以下、引用本文及び章段番号は、田中重太郎『校注枕草子』（笠間書院 昭五〇）による

② 昭和一〇年代の小沢正夫「枕草子の成立時期についての考察」、岸上慎二「枕草子の史実の文の年代について」（『清少納言伝記攷』所収）以来、現在の注釈書に至るまで、後述する森本氏・萩谷氏を除いて、それ以上詳しい考証には及んでいない。ただ前半の年時について、定子は長徳二年六月に二条宮を焼け出されて以降の居所が不明であるためか、その動向が明らかになった長徳三年の職曹司参入以降を考える説（池田亀鑑『全講枕草子』昭三一、森本元子『枕草子必携』昭四二など）があったが、必ずしもそうとは限らないだろう。

③ たとえば、池田氏『全講』は「長雨でつれづれな折の、罪のないたわぶれごとが主になっており」と述べられ、現在も特に年時を特定しない注釈書が多い。

④ 拙稿（旧姓上丸）「枕草子一五七段の読み―章段構成についての一考察―」（『国文目白』第29号 平元・11／『日本文学研究資料新集4枕草子』所収）

⑤ 原岡文子「『枕草子』日記的章段の笑いについての一考察」（『平安文学研究』第五七輯 昭五二・6／『源氏物語両義の糸』『日本文学研究資料新集4枕草子』所収）

⑥ 作者里居の事情は「殿などのおはしまさで後」の段に語られ、里居中の作者を源経房が訪問した年時について、すでに三巻本勘物に長徳二年七月の記述がある。里居の期間はその少し前の夏から、経房訪問後の秋と考えるのが通説。

⑦ 菊地京子「『所』の成立と展開」（『史窓』二六号 昭四三・3／有精堂『論集日本歴史3平安王朝』所収）

⑧ 中宮彰子の出産のことを記した『紫式部日記』では、産養の際に、様々な衣服と同時に懸盤や御皿、下机が贈られ、また、海甫に蓬莱山の模様の衣筥が見える。また、『御産部類記』元永二年（一一一九）に「従内裏被調献御調度」について、蔵人頭と陰陽師を呼んで調度を移す日時を決め、先例では五カ月あるいは六カ月（妊娠月を表すか）に始める旨の事が記されている。

なお、萩谷朴氏は『新潮日本古典集成』において「修子内親王の三・五・七夜等の産養や五十日・百日の儀等の御前の調度を作るために、信経が度々明順の小二条宅の中宮御所へ絵図面を持参して指示を仰ぐ必要のあった時であろうか」と述べられ、十二月（清少納言再出仕後、定子出産の月）と推定されているが、拙稿の立場は、清少納言里居前と考えるものである。ただし、出産の準備については、何がどれ程前から用意されたのか等、不明の点が多く、さらに一考を要する。また、この時の調度が定子に関するものでない可能性もある。その場合、当時の清少納言の神経を逆撫でするようなものであったとすると、なお面白いと思われるが、あくまで想像の域を出ない。

⑨ 前掲注②の森本氏はすでに五月と推定されている。

⑩ 萩谷氏『集成』は七月下旬白露の頃とされる。『総索引』によれば、枕草子中、雨の全用例の約五分の一、そのうち何月か分かる用例の約三分の一が五月の雨である。また、「五月の長雨のころ」（一九二段）「池ある所の五月、長雨のころ」（一本二六）などの表現から、「雨のうちはへ降るころ」も五月と考えるのが最も自然なのではないだろうか。

⑪ 先に拙稿（「枕草子『殿などのおはしまさで後』の段年時考―山吹の花の季節から―」『日本女子大学大学院紀要』第一号　平七・3）において、作者の里居を、長徳二年夏頃から長徳三年晩春頃までと考えた。それに考え合わせると、九九段前半は作者が定子サロンの窓口として復帰した直後の逸話として位置付けられる。つまり、この段は前半と後半の記事の直前直後に、作者の長期里居の時期を挟んでいることになる。

⑫ 小さな時間逆行ということでは、積善寺供養を取り上げた長い二六二段にも、二条宮行啓当夜の清少納言の個人的な記事を、翌朝の二条宮描写の後に挿入するという例がある。

⑬ 前掲注④参照。

⑭ 松本邦夫「枕草子の『回想』―〈はなし〉と〈かたり〉の位相―」（『古代文学研究』第二次第二号　平五・10）

⑮ 前掲注⑪参照。

⑯ このような章段構成は、長徳二年以後の章段についても、清少納言と藤原行成の交流を語る四七段に見られるが、長徳二年に関わる章段にほぼ集中していると言ってよいだろう。

⑰ 本稿では、九九段第二段落で清少納言が語る打聞きについて述べる余裕を持たなかったが、この段および作品全体にとっても重要な部分と考えているので、稿を改めてさらに考察したい。

（あかま　えつこ・日本文学）